

## 5 初発乳がん手術後に補助内分泌療法のみを受ける患者の体験

### —閉経後患者に焦点をあてて—

○森川 華恵（医療法人天声会おおもと病院）、藤野 文代（関西福祉大学看護学部）

#### I. はじめに

近年、乳がんは原発巣手術の時点で、微細転移がすでに存在していると考えられるため、全身病であるという概念に基づき、術前及び術後の補助療法（科学療法、放射線療法、内分泌療法）が行われている。現在、内分泌療法は60～80%の乳がん患者において有効で、一般的に治療期間が一番長い、化学療法患者等と比べ看護師のケアが十分でないことが予想される。そこで、本研究は初発乳がん手術後に補助内分泌療法を受ける閉経後の患者の体験を明らかにすることを目的とした。

#### II. 方法

1. 方法：質的帰納的研究法
2. 対象者：初発乳がん手術後に補助内分泌療法としてA I 剤を1年以上内服継続中の患者。
3. 倫理的配慮：調査施設及びA大学大学院保健学研究科看護学分野の倫理委員会の承認を得た。
4. データ収集：2010年3月から8月。

#### III. 結果

対象者は、女性6名、年齢は60～80歳代（平均年齢は69.2歳）で、面接平均時間は、29分であった。録音には、全ての対象者から同意を得ることができた。初発乳がん手術後に補助内分泌療法のみを受ける閉経後の患者の体験は、【補助内分泌療法を受けながら、今まで通りの日常生活を継続する】【補助内分泌療法による副作用症状を自覚する】【補助内分泌療法中であるが、更年期様症状は年齢的に出現しないと理解する】【A I 剤を内服継続できるように工夫している】【補助内分泌療法による副作用症状をA I 剤内服直後に起こるとは限らない】【予後・再発・遺伝などへの不安がある】【乳がんと共存するよう努力する】【医療者と関係を保つ】【再発予防のため、補助内分泌療法を受けながら自己で対処する】【乳がんの手術に伴う変化がある】【乳がんの手術に伴う変化がない】の11個が明らかになった。

#### IV. 結論

11の体験が得られた。看護実践の示唆として、①必要な情報を提供し、外来でも継続した支援、②必要な治療期間を患者が治療継続していけるように個々に合わせた継続したケア、③入院・外来という枠組みを超えて病院として対象者がより適切な支援を受けられるような体性作り、④対象者の対処行動を見守り、必要時、選択肢を提示し、患者が対処行動を自分で選択できるように支援、⑤予後・再発・遺伝などへの不安を軽減させるために、看護師は医師との協働・連携をはかる。また、不安を引き起こしている根本の原因を明らかにし、ケアを提供、⑥個別の対応やそれ以外に自助グループを立ち上げ、徐々に患者で運営できるように支援する、⑦専門的な乳房の調整のケアを行う必要がある、以上7つの示唆が得られた。